

亀井南冥と太宰府

亀井南冥は、江戸時代後期の福岡藩の学者・教育者です。寛保3（1743）年8月、筑前国早良郡姪浜村に生まれ、熊本・京都で儒学と医学を学んだのち、福岡藩の儒医に取り立てられます。天明3（1783）年には、藩校西学問所甘棠館の学頭となり、多くの優れた門人を育成します。南冥の人となりは豪放にして磊落、その学風も当時の最新の儒学・医学を修め、「関西無双」などと評されました。

亀井南冥と太宰府との深い繋がりを示すものとして、現在、大宰府政庁正殿跡向かって右に建つ「太宰府碑」があります。

「太宰府碑」は、寛政元（1789）年に南冥が文章起草したものです。このなかで南冥は、古代大宰府が有した防衛的機能と、長崎警備を担う福岡藩を重ね合わせて論じています。この時期の政庁跡は人々の関心が薄れ、礎石も開墾などにより消滅の危機にありました。南冥は、政庁跡の礎石の保存・管理を福岡藩に強く提言し、忘却されつつある「大宰府」の歴史を顕彰することで、福岡藩の歴史の「由緒」を掘り起こそうとしたと考えられています。

南冥と太宰府との関わりは文化面

太宰府人物志

資料室だより ⑧

にも及びます。文化3（1806）年、秋月藩主の主催で総勢約百名の人々が参加した書画展示会が太宰府天満宮で開催されますが、これは南冥を始めとする亀井一門が総力を集めて実現したものでした。こうした大規模な書画展示会の開催は、地方都市ではまだ珍しい頃のことです。さらに南冥は、福岡藩に登用される前後、太宰府に私塾を設ける計画も立てていました。

寛政4（1792）年、南冥は甘棠館の学頭を免せられ、退役処分となります。これは朱子学を奉ずる竹田家などの派閥抗争に敗れた結果でした。そして、文化11（1814）年3月、自宅の火災によって、享年72歳にて亡くなりました。南冥が起草した「太宰府碑」も生前に建立されることはありませんでした。

しかし、南冥の太宰府への思いはその門人らを通じて広がっていきま す。奥村玉蘭は書画を飾る絵馬堂を天満宮に建立したほか、南冥の息子昭陽を学頭として、学校院跡に甘棠館を再興しようとしました。さらに南冥没後百年の大正3（1914）年には、南冥を慕う人々により「太宰府碑」が建てられることとなります。

市史資料室 古賀 康士